

2018年度 世界展開力強化事業
中南米との大学間交流プログラム（短期留学）帰国報告書

国際食料情報学部・食料環境経済学科・4年 矢部 拓巳

私は今回、9月2日から9月17日にかけてペルーの短期留学プログラムに参加した。ペルーでは、リマ・カハマルカ・プカルパの三つの地域を訪問したが、どの地域にも異なる気候や特徴であり、各地それぞれ新鮮な気持ちで過ごすことができた。

私がこのプログラムに参加する目的は、大きく分けて二つあった。一つは、現地の大学や研究所、農場などにおける体験や見学を通して、特に現地の農業の状況を理解することである。中南米における農業の現状は、日本とは全く異なるところがあれば、どこか類似している点も多くあると思うので、互いを照らし合わせながら体感したく思っていた。また、今後私自身が農業に関連する職や活動に携わり、農家全体の所得向上や持続のために様々な課題をクリアしていくことに貢献する役目があると思っている。そのため、今回経験したことや目で見たことを、今後の自分の行動に活かしていきたい。

もう一つは、実際に中南米の生活や文化に直接触れることによって、日本では味わうことのない感性や考え方を得ることである。所属が国際的な学部ということもあり、異なった文化や伝統、習慣を学ぶことがよくあり、その都度興味を持つとともによく考えさせられることがあった。今回のこのような機会を通して、より間近に文化を感じ、現地の方々と交流することで良い刺激を受けられるはずである。そして、私に足りない柔軟力や視野の幅を広げるため、また発見したこと経験したことを様々な人に発信していくことを目的として参加しようと考えた。

まず、最初に訪れたペルーの首都であるリマでは、交通量の多さに驚いた。早朝にも関わらず車通りの多さと飛び交うクラクションに衝撃を受けた。それも、リマのあるペルー面積の10%に値するコースト地域には、国民の80%が暮らしており、人口密度が非常に高いのである。また、空が常に曇っていて空気が汚れているように感じたが、これはペルーの海岸を流れる波が非常に冷たく、蒸発しきらないために発生している霧だそうだ。こうして、一つの地域の特色を早速感じる事ができた。それは、この後訪問した他の地域にいて、よりそれを体感したものであった。リマでは主に、協定校であるラモリーナ国立農業大学（UNALM）で活動を行った。ここは非常に大きな土地を有し、農地も含め全体で200ヘクタールほどあるそうだ。膨大な面積があることによって、様々な栽培や畜産が可能性の幅が広がっているのではないだろうか。学生に校内を案内してもらい、水耕栽培や土を使わずにチューブで栄養を送る栽培といった、最新技術を駆使したシステムでの栽培も学生たちで行っていた。農学部の学生たちは、卒業のために一つのチームに所属する必要があり、それぞれが意欲をもって農業に取り組んでいるようだった。その後、学生との発表を交換し、互いの国の農業の情報を知ることができた。ロベルト・ウガス先生からは、ペルーの気候や農業の特徴を教えていただいた。ペルーの農業は、小規模農家が多いことなど、日本と似た部分があるそうだ。学生との文化交流では、こちらが抹茶とお菓子を、ペルーの学生からは「カウサ」や「アヒアマリージョ」を振舞っていただい

た。このようにして、互いの文化を認知し理解し合うのは、大変良い経験であった。それから、ミゲル・マラガ先生からは、地元地域にある粘土壤による圧力調査の研究の過程を説明していただいた。この研究をもとに、その粘土壤をダム素材に活かせるのかを調査するようだ。また、調理の残り物や食品からバイオディーゼル燃料に効率よく変換し、実際にモーターを動かすなどして調査している研究所も紹介していただいた。再生可能エネルギーというメリットや食品安全問題のデメリットの両面があるという課題も知り、大変勉強になった。どちらも自分の分野とは異なり、難しい内容ではあったものの、だからこそ話の貴重さを感じた。ヴィクトル・ペーニャ先生にもペルーの地理学やスペイン語の基礎を教えていただいた。リマの中心街にも共に同行していただき、街を案内していただいた。そしてリマでの最終日には、インターナショナルポテトセンターを訪問することができた。まず、ペルーが原産地であるじゃがいもが約8000種類もあるということを知り、衝撃を受けた。それらはそれぞれ用途が異なり、4500が元々アンデスのもの、3000が品種改良研究用のもの、残りの500が国のお金のためにあるものだという。こちらの研究所では、このように多様なじゃがいもの研究が常に行われており、今後もまだまだ終わることなく続けられるであろう。

次に訪れたカハマルカは、またリマとは一風変わった景色と特徴があった。標高も常に3000メートル前後と、普段日本で生活している環境とは異なり、高山病や乾燥など体調管理を気にしながら過ごした。東京農業大学を卒業している、エドガルとジャスミン夫妻宅にホームステイを受け入れていただき、カハマルカ内の各場所に連れて行っていただいた。まずは、子供たちのお迎えに付き添い、おそらく幼稚園から中学まで一貫されている学校施設を訪問した。カハマルカには、学校施設が想像以上に各場所に配置されており、教育の面では不自由のないように思えた。少し山道に入り、モニカさんが営むバラの温室農家を訪れた。そこでは、様々な種類のバラをかなり大きな規模で栽培していた。ニンニクや唐辛子を用いた、自然由来の方法で病害虫を予防し、また市場も多く確保しているようであった。それから、ヘススの先住民マーケットを回った。滅多に見ない日本人の顔が珍しいのか、注目を浴びていた。女性の方は、皆共通のペルー独特の格好や帽子をかぶり、商いをしていた。豊富な地元果物や野菜から、食用動物や輸入品であると思われる品々までが街路中に広がっていた。モルモットには手が出せなかったが、果物類を皆で試してみた。最後に街にいた小さな子供たちに、持ってきていたラムネを譲ると喜んでくれた。それを見ていた家族らしき人達も集まり、共に写真を撮らせていただいた。一度家に戻り、歩いてすぐのインカ温泉に行くことができ、久しぶりに湯に浸かることができた。温泉はしっかりと硫黄の香りがし、入浴は基本個室式交代制で、プールタイプ式もありここでは水着を着用して、公共的に利用することができるようだ。昔から先祖が利用している歴史もあり、本格的な温泉施設がそこに存在したことには驚いた。家に帰ると、度々次男のエリアスや三男のサルバドルが屋上でサッカーをしようと呼びかけてくれ、標高の高さにすぐに息切れをしながらも楽しく充実する日々であった。さらに、広大な土地を夫妻が案内してくれたが、途中途中で道端に小さな犬小屋のようなものがあった。何かを尋ねると、それはお墓だそうで、そこで事故等で亡くなった人の名前が刻まれていた。毎年命日になると家族がお墓を訪れ、花やお供えをするようだ。その後も道を見渡していると、いくつもお墓があることに気づき、日本には決してない文化にまた驚いた。そこからまた

離れたポロックというところにある教会を訪れた。そこには、宗教の学校もあり学生たちが作った見事な教会の施設や品物もあり、技術の高さに感銘を受けた。ペルーには数多くの教会があり、特に中心街には必ず大きな施設があった。その中でもこの教会は一線を画していた。その後は、ポルコンファームを訪れ、多種多様な動物を見ることができた。ペルーには、コンドルをはじめとして、特に鳥類の数が多く存在していて、そこも一つ特徴として国が積極的に推して考えているようだ。一匹2ソレスのマスを手釣りで33匹も釣ってしまい、その日のディナーは大変豪華なものだった。最終日には、エドガルさんの職場である標高4000メートルにもなる地を訪れ、マイニングの現場を見学することができた。ここもかなり大規模に行っていて、一日約450トンもの金や鉱物を運んでいるそうだ。その結果、工業の面では進歩があるが、金を採取するために有害物質を要するため、農業を推進しているカハマルカとの反発が、現状の課題だそうだ。農家をはじめとする現地の人々とうまく共生するため、大きなダムを建設する等の工夫を凝らし努力をしている。この日は、タンタチュアルという山の中にある町の原住農家である、セバスチャン宅を訪問した。急斜面の山の一角に家が佇んでおり、作物や家畜も屈強な地で栽培・育成していた。そこにある作物は、その山や気候等の条件が揃ってはじめて栽培できるものなのだろう。最後には、モルモット（クイ）の料理を振舞って歓迎してくれた。未開拓な食べ物に驚いたが、味もおいしく、また異文化に触れる良い経験であった。山からの帰り際には、車が脱輪して動かなくなるというハプニングもあったが、セバスチャンの馬の力を借り、何とか問題を切り抜けた。温かい家族に感謝と別れを告げ、次の地へ向かった。

最後に訪れたのはプカルパであるが、カハマルカが肌寒かったおかげもあり、アマゾンの暑さがより際立った。一気に真夏に戻ってきたようだったが、乾季ということもあり、日本のようなジメジメさがあまりないような気がした。交通も、ほとんどがモトタクシーかオートバイであり、リマやカハマルカとは一変して、まるで他の国に来たかのような印象だった。早速その日は、カムカム事業を行っている鈴木さんに会いに事務所に向かった。そこでは、鈴木さんが今に至るまでの過程やペルーのみならず、中南米についてのレクチャーをしていただいた。日本や他国への輸出には、冷凍コンテナを使って大量のカムカムを一度に送っているそうだ。また、本当のフェアトレードが行われているかが問題視されている。この後に経験するカムカムの収穫において、それをより体感することができるのであった。ペルーには3大奇跡があり、一つは食べられないとされていたジャガイモが食べられるとわかり、ヨーロッパの危機を救ったことである。もう一つは、マラリアの薬があるアマゾンの水から生まれたということである。三つ目は、猫の爪の形をしているキャツクロー（ウニャネガット）があり、様々な病に効くとされていることである。そのようなことも鈴木さんから教えていただいた。翌日には、農場で栽培している様々な植物を紹介していただいた。見たことのないものだらけで、大変刺激的であった。10数メートルはあるアグアへの木になる実を、難なく収穫する現地の方には感銘を受けた。また、養殖しているピラルクー（パイチェ）に餌やりをし、カムカムの収穫に取り組み始めた。この気候で、作業をしている現地の方々のタフさを思い知った。現場の苦労を体感したことで、いかにフェアトレードが大切かに気づくことができた。その日はご飯や飲み物がより一層おいしく感じた。ほかにも、アマゾンでは雨が多く、肥大化してしまうため普段栽培しないさつまいも植えに挑戦した。まず雑草を刈るのだが、斬刀（マチュテ）をう

まく現地の方のようにには使いこなせず、少し苦労した。なんとか土も耕し畝を作ったが、隣にある大きな畝には到底敵わないものだった。さつまいもは、安念芋と紅はるかの2種を植えた。この日は、農場に一泊まることにし、アマゾンの虫や星を眺め、夜と朝の嘘のようなアマゾンの寒さを体感することができた。農場で過ごすのは、少し不安はあったが、それよりも貴重な経験になった。それから、農場内に唯一残してある自然林を訪れ、アマゾンらしき姿も見ることができた。そして、料理して食べるためのパイチェの捕獲が始まった。体長1メートル弱はあり、重さ約12キロもあるパイチェがいる池に皆で入り、手づかみで試みたが、パイチェの勢いに負け、現地の方々と協力し網で獲ることに成功した。それから、血抜き・氷保存をした後に調理が始めるも、なかなか鱗がうまく取れず、最初は苦労したが、その甲斐あってか徐々に鱗取りがうまくなっていった。さばくのも大変で、3人がかりで終えるまで3時間ほどかかってしまった。新鮮なパイチェをさばくのも、食べるのも初めてだったが、非常においしくいただけた。特に、鈴木さんが用意してくれていた刺身は、淡水魚とは思えないほどの良い味だった。また、パイチェの計測も別の日に行ったが、ある程度まで成長すると短期間でかなり大きくなる育ち方をするという。それを測る機会に立ち会うことができ、良い経験になった。パイチェの養殖には、時間も手間も体力もかかり、大変なことだが、未開拓な生体の実験をする鈴木さんや現地の方々の努力にパワーを感じた。最後に、最初に収穫していたアグアへを潰して作るアグアヒーナという飲み物を皆で作った。アグアへはまだ日本にはないが、今後機能型の食品として広がってくるということで、非常に可能性のある作物である。プカルパではほかに、ウカヤリ川につながるヤナコチャ川をボートで遊覧したり、ナマケモノやアナコンダと触れ合ったり、ネズミや鹿、イノシシの獣肉に挑戦したりと様々な経験をした。最終日は、あいにくの雨であったが、アマゾンの強烈な雷雨を見ることができた。また、鈴木さんからは、ペルー人の特性も教えていただいた。リマの人々は、陽気でおしゃべりで喧嘩っ早いということ、アンデスの人々は日本人によく似て、頑固で働き者が多いということ、アマゾンの人々は、穏やかであるということを知った。鈴木さんとしては、ペルーの人々と関わる時は、一度は相手に騙されるつもりで接し、二回目からはコミュニケーションをとりながらうまく指導していく。日本人は上として尊敬される立場で接していかないと、なめられてしまい、騙されてしまうという。このようなことも、プカルパにおいて学ぶことができた。

今回ペルーの短期留学プログラムにおいて、一つ目の目的達成のためにまず、現地の多様な農業を見ていく中でキーワードだと思うポイントの数々に耳を傾け、それを記していった。そのポイントを絞って見極めるという点では、努力することはできたが、それを活かしていくかどうかは今後の行動によって決まると思う。そのため、実際にこの目で見た農業の現状を忘れず、キーワードをさらに整理していくことで、目標を達成する気持ちを継続させていきたいと思う。また、もう一つの目的達成のために、現地の人々と積極的に交流することを意識していたが、やはりなかなか通じえないものがあったり、意外な反応があったりと言語がわからない分、難しい面が多かった。しかし、約2週間の間だったが、相手が何を言いたいのか、何を伝えようとしているのかが見えてきて、面白い経験ができた。互いの文化を平等に交換できたかよりも、現地の考え方はこうなのだという理解が、私なりにできたのではないだろうかと思う。ペルーの人々をはじめ、日本人の口に合

う食べ物、知らなかった文化、地域によって異なる気候など、どれを含めてもペルーを好きになったということが、何よりの成果であったと考える。両者とも達成度はまだまだ不十分だが、今後その不足している面を深掘し、現地で経験したことを本当に有意義なものにしていきたい。また、今後も関連することに目を向け、積極性をもってそれらに参加していきたいと思っている。ペルー人のタフさに負けぬよう、活動していくつもりである。

プログラムへの要望としては、来年で最後だというこのプログラムを可能な限り、違った形でもよいので、これからも継続して欲しいということだ。留学といえば長期的で高価なイメージだが、短期のプログラムもあるため、少し勇気があれば、誰もが気軽に経験できる貴重な機会だと考えられる。このような環境が、身近にあるということをもっと発信していくことで、これからもっと可能性のある人材が湧き出てくるのではないだろうか。この世界展開力のプログラムには、頼もしい引率者が短期の場合は特に、常に寄り添ってくれるので安心して参加することができると考えられる。今回、幸運なことにもタイミングが良く、このプログラムに参加することができ、非常にうれしく思ったため、もっと多くの人に、同じかそれ以上の経験をさせていただけたら幸いである。